

アクセスマップ



ご利用の案内

- ◎開館 9:00～17:00 ※入館は16:30まで
- ◎休館 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は翌平日) 12月29日～1月3日
- ◎交通
 - [県北バス] 盛岡駅→啄木記念館前 40分
 - [JRバス] 盛岡駅→啄木記念館前 30分 (バス停より徒歩5分)
 - [IGRいわて銀河鉄道] 盛岡駅→渋民駅 20分 渋民駅から 徒歩 25分 タクシー 5分 貸し自転車 10分
 - 好摩駅から タクシー 8分

入館料

- 個人
- 大人……………300円
 - 高校生……………200円
 - 中学生・小学生……………100円
- 団体 (20名以上)
- 大人……………240円
 - 高校生……………160円
 - 中学生・小学生……………80円
- 障がい者手帳をお持ちの方、盛岡市に住所を有する65歳以上と中学生以下の方は、確認できるものを提示いただきますと、無料になります。
- 〒028-4132
若手県盛岡市渋民字渋民9番地
Tel: 019-683-2315
Fax: 019-683-3119
URL▶http://www.mica.jp/takuboku/

記念スタンプ



石川啄木年表

【明治】

- 19年 2月20日 日戸村 (現盛岡市) の常光寺に父一禎、母カツの長男として生まれ「一」と名付けられる。
- 20年 3月30日 渋民の宝徳寺に転住。
- 24年 5月 2日 渋民尋常小学校 (現盛岡市立渋民小学校) に入学。
- 28年 4月 2日 盛岡高等小学校 (現盛岡市立下橋中学校) に入学。
- 31年 4月25日 盛岡中学校 (現若手県立盛岡第一高等学校) に入学。
- 35年10月 1日 『明星』に白鷺の筆名で初めて短歌一首が載る。
- 10月27日 盛岡中学校を退学。
- 11月 9日 東京新詩社を訪問し、初めて与謝野鉄幹に接し、翌日は与謝野晶子に会う。
- 36年12月 1日 『明星』に「啄木」の筆名で詩「愁調」が載る。
- 38年 5月 3日 処女詩集『あこがれ』刊行。
- 5月12日 堀合節子を妻として入籍。
- 9月 5日 文芸雑誌『小天地』刊行。
- 39年 4月14日 渋民尋常高等小学校の代用教員となる。
- 12月29日 長女京子誕生。
- 40年 5月 4日 渋民を離れ、函館に向かう。
- 6月11日 函館の弥生尋常小学校の代用教員となる。
- 8月18日 函館日日新聞社の遊軍記者となる。
- 8月25日 函館大火で勤め先を失う。
- 9月13日 札幌に向かい、16日から北門新報社に勤務。
- 9月28日 小樽日報社に勤務。
- 41年 1月22日 釧路新聞社に勤務。
- 4月 5日 東京での文学活動をめざして釧路を発つ。
- 5月 4日 東京本郷区菊坂に下宿。
- 9月 6日 本郷区森川町の蓋平館別荘に移る。
- 42年 3月 1日 東京朝日新聞社校正係に採用され、入社。
- 6月16日 妻子を迎え、住まいを本郷の喜之床二階に移す。
- 43年12月 1日 歌集『一握の砂』刊行。
- 44年 2月 4日 慢性腹膜炎のため入院。
- 8月 7日 小石川区久堅町へ転居。
- 45年 3月 7日 母カツ死去。
- 4月13日 父一禎、妻節子、若山牧水に看とられて、啄木死去。
- 6月14日 次女房江誕生。
- 6月20日 歌集『悲しき玩具』刊行。

【大正】

- 2年 5月 5日 節子死去。
- 11年 4月13日 啄木没後10年を記念して、渋民鶴塚に第一号歌碑が建つ。



かつての奥州街道 (現在の県道301号線)。啄木が通った旧渋民尋常小学校や旧齊藤家はこの街道沿いにあった。旧齊藤家の跡地には、啄木歌碑が建立されている。



石川啄木記念館

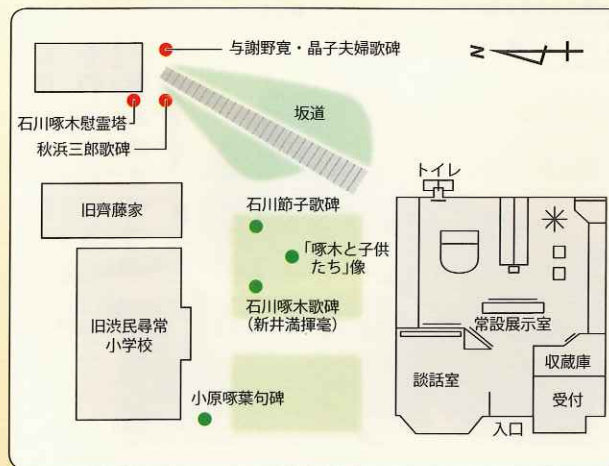


旧齊藤家 (盛岡市指定文化財)



旧渋民尋常小学校 (盛岡市指定文化財)

配置図



啄木文学の揺籃・原点

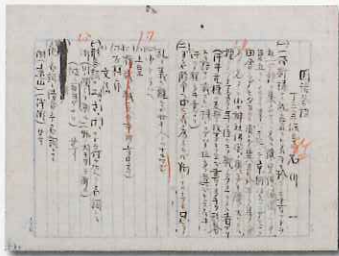


不來方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心
「一握の砂」より

啄木・石川一は、岩手山を見ながら、自然豊かな浪民で育った。僧侶であり歌人であった父の影響で、生命の神秘さやことばの持つ力に魅かれてゆく。その際立つ感受性は盛岡中学校でさらに磨かれ、生涯の友、金田一家助とも親しくなる。後に出会うと謝野鉄幹・晶子との出逢いは文学への歩みを決定的なものとした。



【小笠原謙吉あて絵はがき】明治35年1月10日付。盛岡で開催される誌友会の案内が記されている。



【国語答案用紙】盛岡中学3年生の時のもので、84点と採点されている。



【立花さだ子あて絵はがき】明治37年11月15日、東京から出したもので、浪民村のさだ子らを妹のように思っていることが述べられている。



ストライキ参加直前の啄木（真中）

あこがれの世界



砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日
「一握の砂」より

処女詩集『あこがれ』を刊行したのは啄木が弱冠19歳の頃。堀合節子と結婚し、盛岡市帷子小路で新婚生活を始めた。また、啄木鳥の樹をつつく音を聞いていたことから、啄木というペンネームにしている。



【阿部泥牛あて書簡】明治37年9月12日に浪民村から出したもので、3日間、盛岡でお世話になったお礼が述べられている。



【あこがれ】明治38年5月に出版された処女詩集。当時詩壇の第一人者であった上田敏や謝野鉄幹が序詩や跋文を贈り、若き詩人の船出を祝福した。



【小天地】恋人・節子と結ばれ、結婚生活を始めた啄木が発行した文芸雑誌。各方面から注目を集めたが、1号で終刊せざるを得なかった。



【上野さめ子あて絵はがき】明治37年12月11日付。さめ子の甥にあたる広一と下宿で語り合ったことが記されている。



たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず
「一握の砂」より

林中の生活



ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな
「一握の砂」より

林中（りんちゆう）
林に囲まれた自然のことだが、啄木にとっては「浪民」のこと。

故郷浪民に戻った啄木は、「日本一の代用教員」を自負し、生徒の指導にあたる一方、文学活動にも意欲を燃やし、小説『雲は天才である』や教育評論『林中書』を執筆した。



啄木の愛用した
リードオルガン



明治期の
木製のカルタ

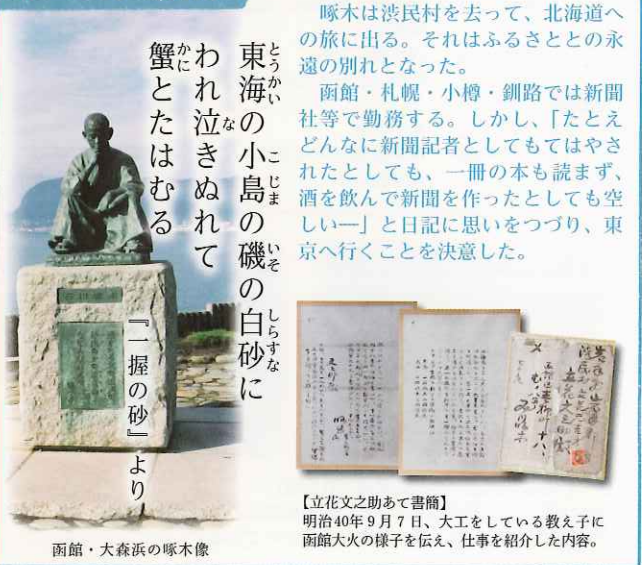


【英語教案】母校・浪民尋常高等小学校に代用教員として勤めた啄木が、課外授業で使った英語の教案。



【太田駒吉あて書簡】明治39年4月23日、借金返済の延期を依頼する内容。

北への漂泊



蟹とたはむる
われ泣きぬれて
東海の島の磯の白砂に
「一握の砂」より

啄木は浪民村を去って、北海道への旅に出る。それはふるさとの永遠の別れとなった。

函館・札幌・小樽・釧路では新聞社等で勤務する。しかし、「たとえどんなに新聞記者としてもはやされたとしても、一冊の本も読まず、酒を飲んで新聞を作ったとしても空しい」と日記に思いをつづり、東京へ行くことを決意した。



【立花文之助あて書簡】明治40年9月7日、大工をしている教え子に函館大火の様子を伝え、仕事を紹介した内容。

函館・大森浜の啄木像

東京時代



金田一家助と啄木

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれどー
「悲しき玩具」より

ひとり上京した啄木は、執筆活動を続けながら、東京朝日新聞社の校正係として働いた。歌集『一握の砂』、評論『時代閉塞の現状』など優れた作品を発表するが、明治45年4月13日、26年2カ月の短い生涯を閉じることとなる。



【岡山儀七あて書簡】明治43年10月10日付けの書簡。第一歌集『一握の砂』の出版が近づいていることを伝えている。



【金田一家助あて絵はがき】明治42年12月15日付。東京でも下宿生活をしながら支えてくれた親友の京助にあてた。



【呼子と口笛】東京の新聞社時代に書いた詩稿ノート。理想のわが家を描いた「家」など8編の詩が収められている。



馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に
「一握の砂」より



【悲しき玩具】啄木の没後2カ月に出版された第二歌集。闘病生活の苦しみや故郷への思いを詠んだ歌は、多くの人たちの共感をよんだ。



【歌集『一握の砂』】明治43年12月1日、東京の東雲堂書店から出版された。551首の歌が収められており、人間として誰もが抱えている気持を表現している歌が多いと評判になった。